

雑談における物語の評価表現

—「と思う」をめぐって—

張未未（早稲田大学）

キーワード：雑談、物語、評価、「と思う」、学習者

1. 研究背景と目的

私たちの日常生活を顧みれば、勧誘や依頼等の目的が明確な「課題遂行会話」よりも、特定の目的がない「雑談」に満ちていることに気が付くだろう。雑談の中には、過去の体験や出来事を語る「物語」(李 2000)がよく生じる。物語に対する語り手の感想や意見を述べる部分は、「評価(evaluation)」(Labov&Waletzky1967)と呼ばれており、雑談の中では、聞き手との相互行為によって行われる(Maynard1989:118)という。評価を共同に構築することで、参加者の間にラポールが生み出され、両者の良好な人間関係が育まれる(Thompson&Hunston2000:6-13)ため、物語の評価は、雑談の中では重要な役割を果たしていると言える。

物語の評価は、一種の意見陳述である。その典型的な表現形式として、思考動詞の「思う」が挙げられる。「と思う」は、「話者の判断や意見を相手に向けて表明する表現」(日本語記述文法研究会編 2003:184)であり、日本語教育の現場では、意見を表す文末表現として、初級レベルの早い段階で導入が行われている。それにもかかわらず、物語の流れに沿って評価を述べることは学習者にとって難しい(佐々木 2010)とされている。では、「と思う」は、物語の評価の模様をどのように織りなすのだろうか。

本研究では、「と思う」が用いられる評価表現に焦点を当てて、日本語母語話者と日本語学習者の雑談における物語の評価の一端を明らかにし、その結果を日本語の会話教育に寄与することを目的とする。

2. 先行研究

2. 1 物語の評価に関する先行研究

物語の評価には、音韻的(phonological)・語彙的(lexical)・統語的(syntactical)・談話的(discoursal)等の異なるレベルのものがある(Labov1972, Polanyi1989:22-23)とされており、談話における出現位置によって、物語の進行を遮らずに暗示的に示す「埋め込み評価(embedding of evaluation)」と、物語の流れから飛び出して直接に示す「外部評価(external evaluation)」とに分けられる(Labov1972:370-375)。継起的に行われる「埋め込み評価」には、登場人物である語り手の思考を引用する表現があり、それが出来事の相対的重要性や感情を強調する評価的機能を発揮する(小玉 2019)とされている。

2. 2 「と思う」に関する先行研究

日本語学の分野においては、「と思う」をめぐって、これまで数多くの議論がなされてきたが、先駆的なものとして、森山(1992)がある。森山(1992)は、「と思う」を「文末思考動詞」と呼んでおり、その前接成分によって機能用法を大きく「不確実表示用法」と「主観明示用法」の2種に分けている。物語の評価における「と思う」は、主に「主観明示用法」に当たる。

一方、「と思う」は、「自己引用」(メイナード 1997)として用いられることも多い。言い切りが可能な現在の話し手の意見や主張を敢えて「と(思う)」によって提示することで、表現を和らげたり引用内容を捉え直したりするといった機能につながる(立川 2014)という。また、遠山(2016)は、自己引用の「と

思う」を、生き生きとした場面を発話に導入することができる表現方法として捉えている。

3. 研究方法

本研究では、雑談における物語のうち、「と思う」が用いられる評価表現に着目し、日本語母語話者と日本語学習者による「と思う」の使い方を、①物語における出現位置別の出現頻度、②前後に隣接するモダリティ表現、という2つの側面から明らかにする。

本研究で扱う調査資料は、日本語母語場面(以下、母語場面と称する)と日中接触場面(以下、接触場面と称する)における20代の親しい女性友人同士による日本語の雑談それぞれ4資料、計8資料(全4時間18分53秒)¹⁾である。接触場面に参加する日本語学習者は、全員「日本語能力試験N1」取得の中国人上級日本語学習者である。

「物語」は、Labov(1972)と李(2000)の定義をもとに、「連続する2つ以上の節からなる過去の出来事を再現する語り」と定義する。「物語の評価」は、「物語」と絡みながらも、「物語の話題のまとまり」をなしている。調査対象となるのは、「物語の話題のまとまり」に現れる、語り手及び聞き手による物語の内容の一部または全体に対する感想や意見を表す評価表現のうち、「と思う」が含まれる表現である。具体的には、「と思う」の終止形や、肯定や否定・テンス・アスペクト等の働きを持つ助動詞・補助動詞が付加したものが該当する。なお、「思う」が省略されたと想定できる「って」や「と」などの引用表現も調査対象に含める。

4. 物語の評価表現における「と思う」の使用実態

4.1 「と思う」の出現頻度

雑談全8資料から、122例の物語(母語場面:55例、接触場面:67例)が得られた。物語の評価に「と思う」が用いられる表現は78例あった。そのうち、母語場面におけるものは44例(56.41%)で、接触場面におけるものは34例(43.59%)であった。1物語に対する「と思う」が含まれる評価表現の数は、接触場面(0.5)よりも、母語場面(0.8)のほうが多かった。

一方、全78例のうち、「埋め込み評価」は51例(65.38%)で、「外部評価」は27例(34.62%)であった。テンス・アスペクトの観点から、NSとCNSによる「埋め込み評価」と「外部評価」として用いられる「と思う」の内訳を、次の<表1>²⁾に示す。

<表1> NSとCNSによる「と思う」の出現頻度(「埋め込み評価」/「外部評価」)

場面/参加者		思う	思っ(て)	思った	思っ(て)いた	って	合計
母語場面	NS1~NS8	2/16	8/4	5/1	7/0	1/1	23/21
接触場面	NS1~NS4	0/1	4/1	3/0	1/0	3/2	11/4
	CNS1~CNS4	0/2	6/0	10/0	1/0	0/0	17/2

<表1>に示したように、接触場面よりも、母語場面のほうが、「と思う」による「外部評価」が活発に行われる。NSが、現在形の「と思う」や言いさし形式の「と思っ(て)」を用いて、発話時の心情を披露し合うことが窺える。それに対して、接触場面では、現在形の表現はほとんど用いられておらず、発話時の評価が言語形式として表現されていない。

一方、「埋め込み評価」では、CNSは、過去形である「思った」が他よりも圧倒的に多いが、NSは、言い切らない「と思っ(て)」が一番多く、その多くは「自己引用」であり、そこにはNSの発話時の感情や意見が前景的に表されている。また、現在形でありながら過去を表すものとして、NSに用いられる「と思う」があるが、いずれも連体修飾節の中の「自己引用」の例である。このように、母語場面では、

NS の感情移入によって、物語の過去と現在の境界が曖昧であることが窺える。それに加えて、CNS に 1 例も見られなかった「って」は、NS が使用している。NS は、過去形でない「と思う」を用いて物語の臨場感を際立たせているのである。

4. 2 「と思う」に隣接するモダリティ表現

日本語記述文法研究会編(2003)で取り上げられたモダリティ表現を参考にして、全 78 例の評価表現の、場面・参加者別に「と思う」に隣接するモダリティ表現をまとめた結果を、次の<表 2>に示す。

<表 2> NS と CNS による「と思う」に隣接するモダリティ表現

場面／参加者		「と思う」表現 (例数)									
母語 場面	NS1～NS8	思う	10	思っ(て)いて	5	思った	2	思っ(て)た	0	って	1
		な～	1	な～	1	～の	2	な～	1	んだろうな～	1
		よ～	1	しょ～	1	～んだ	1	～んだ	1		
		そう～	1	んだ～	1	んだな～ね	1	んだ～	1		
		～よね	1	んだな～	1			な～んだ	1		
		～のね	1	だろうな～	1			かな～んだ	1		
		んだ～んだ	1	の～っちゃって	1			のかな～んだ	1		
		んだよ～ちゃう	1	んじゃないんだ～	1			な～さ、みたい	1		
		んだろうな～よね	1								
接触 場面	NS1～NS4	思う	1	思っ(て)いて	2	思った	3	思っ(て)た	1	って	4
				か～	1					んだな～	1
				んだろう～	1						
			のかな～	1							
	CNS1～CNS4	思う	2	思っ(て)いて	3	思った	5	思っ(て)た	0	って	0
				な～	3	な～	3	～んだ	1		
			～よね	1							
		んだ～の	1								

<表 2>によると、CNS は、「と思う」を単独の文末表現として使用することが多いが、NS は、何種かのモダリティと複合させた形の「と思う」表現の使用が多い。この複合された「と思う」表現は、NS は「①ん+②だろう+③な+と④思う+⑤よね」のような最大 5 種ものモダリティを組み合わせ使用しているのに対して、CNS は 2 種のモダリティによって組み合わせられたものがほとんどである。

他のモダリティ表現と複合された「と思う」の表現は、主に「自己引用」の働きを果たしている。つまり、NS は、話者自身の意見と距離を置くことによって、断定回避を図っている。親しい友人との気楽な雑談の談話ジャンルにもかかわらず、相手の領域に踏み込まないような配慮が働いているのである。一方、CNS による「と思う」は、本動詞 ㉞に近い用法になっており、CNS に多く見られた「なと思った」という「自己引用」は、体験当時の心情の提示用法として用いられている。

5. まとめ

本研究では、日本語母語話者と中国人日本語学習者の雑談における物語に着目して、そのうち「と思う」が含まれる評価表現の使用実態を明らかにした。その結果、①CNS は「と思う」の過去形で当時の心情を忠実に表現する傾向があるが、NS は過去の出来事に現在の気持ちを持ち込んで、物語に臨場感をもたらしたりしている、②CNS は本動詞の用法として「と思う」を使って物語当時の感想や意見を述べるが、NS は「と思う」を他のモダリティ表現と複合させて、自分の評価を曖昧にする傾向がある、

という2点が明らかになった。CNSが「と思う」を複合した形の表現を使用しないのは、教育の不足が一つの原因として考えられる。

本研究の結果により、日本語教育の現場では、学習者に物語に対して評価をする際の「と思う」表現の使い方、とりわけ、他のモダリティ表現とどのように組み合わせて使用したらいいかについて、指導する必要があると考えられる。また、物語の表現技法の一つとして学習者に「と思う」表現を教える可能性も示唆されたと考えられる。

注

1) 2015年12月～2016年2月に都内の大学の研究室とレストランでICレコーダーで収録した母語場面と接触場面各4資料の計8資料を用いた。調査協力者は、NS計8名(NS1～NS8)、CNS計4名(CNS1～CNS4)の全12名で、全員20代女性である。NS1～NS4は、母語場面と接触場面の両場面の参加者である。

2) 「思う」の前に来る引用助詞は、「と」や「って」等があるが、表の中では省略する。〈表2〉も同様である。本文では、一括して「と思う」と表現している。

3) 「と思う」には連続性があるとされる(砂川1988)が、本研究では、すべてモダリティ表現として認める。

参考文献

小玉安恵(2019)「体験談における引用助詞ッテ、ト、及び無助詞の機能」、『社会言語科学』21(2), 18-33, 社会言語科学会。

佐々木泰子(2010)「接触場面と母語場面－体験談の終結部から見たその特徴－」、『言語文化と日本語教育』39, 33-40, お茶の水女子大学日本言語文化学会。

砂川有里子(1988)「引用文の構造と機能－引用文の3つの類型について－」、『文藝言語研究 言語編』13, 73-91, 筑波大学文芸・言語学系。

立川和美(2014)「文章と談話における引用表現－随筆と雑談・相談を例として－」、『流通経済大学論集』49(1), 31-47, 流通経済大学。

遠山千佳(2016)『自己引用』表現の談話機能と形式－日本語教育の観点から－, 北京日本語学研究中心(編)『日本学研究』26, 117-131, 学苑出版社。

日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法4 モダリティ』, くろしお出版。

メイナード, 泉子・K(1997)『談話分析の可能性－理論・方法・日本語の表現性』, くろしお出版。

森山卓郎(1992)「文末思考動詞『思う』をめぐって－文の意味としての主観性・客観性－」、『日本語学』11, 105-111, 明治書院。

李麗燕(2000)『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究－会話管理の観点から－』, くろしお出版。

Labov, W. & Waletzky, J. (1967) "Narrative analysis: Oral versions of personal experience", *J. Helm (Ed.), Essays on the verbal and visual arts*, pp.105-120, Seattle: University of Washington Press.

Labov, W. (1972) "The transformation of experience in narrative syntax", *Language in the inner city*, pp.354-396, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Maynard, S.K. (1989) "Causal Narratives in Conversation", *Japanese Conversation: self-contextualization through Structure and Interactional Management*, pp.98-133. Ablex.

Polanyi, L. (1989) *Telling the American story: A structural and cultural analysis of conversational storytelling*, Cambridge, MA: MIT Press.

Thompson, G. & Hunston, S. (2000) "Evaluation: An Introduction", *Hunston, S. & Thompson, G. (eds.) Evaluation in text: authorial stance and the construction of discourse*, pp.1-27, New York: Oxford University Press.